

〔研究ノート〕

LOHAS 「思想」 発展の現状とその未来 —ボウルダーにおける「先進的実験」から学ぶ—

〔Research Note〕

小坂 勝昭

Present and Future of LOHAS Thought —Smart Grids Policy in Boulder—

Katsuaki KOSAKA

Abstract

The object of this paper is to analyze the present state of LOHAS movements in Boulder. In this city, there are many produce retailers such as Whole Foods Market, Green Farmers Market, Safeway, and Costco. Recently these retailers began to sell many organic vegetables, fruits, and dairy products such as milk. These organic goods are very popular among the health conscious in habitants of Boulder. But these goods have been sold at high prices. These organic goods also have competition. In Boulder, there is another street market called "Farmers Market." This market is open every Thursday and Saturday on 13th Street. This market is run by a group of small farmers producing organic vegetables. These individual farmers provide agricultural products recognized as valuable. It is natural and to be to want to buy these healthy organic foods interested in the future of LOHAS in Boulder.

There is also an interesting city plan called the "Smart Grids" Policy. The cost of setting up this policy is estimated at 100,000,000,000 yen. The Exel Energy and Boulder City included it in their budget for 2008, and this major project began in August, 2008.

問題意識

2008年2月、はじめてボウルダーを訪ね、ホール・フーズ・マーケット（WHM）の店頭に並べられた“Organic”と手書きされた「有機野菜」や、「有機果実」に群がるボウルダーの消費者を見たとき、食の安全性を重視する住民の意識の高さに圧倒される思いであった。その後、日本経営倫理学会の「企業行動部会」で報告する機会があった（「ロハス思想の理解のために—ボウルダー報告」）。⁽¹⁾

会員からは、カタカナの「ロハス」が何を意味するのか理解しにくく、LOHASという横文字を使うほうがむしろ親切であるという指摘があり、その意見に従おうと思う。しかし、経営倫理学会の会員にはもっと「LOHAS理解」を深めてもらうことが必要であると感じている。生態系を無視した経営は今後ますます成立しないからである。

そして、2008年8月6-10日、アメリカのロス近郊「アナハイム」で開催された「アメリカ経営倫理学会」に日本側からの参加者の一人として参加し、帰途ボウルダーに再度立ち寄ることにした。今回の訪問には明確な目的があった。LOHAS思想の拡大、浸透に大変に大きな役割を演じてきた雑誌『ソトコト』（木楽舎）の執筆者の中に毎号「ボウルダー通信」を寄稿している井沢敬という「ボウルダー移住者」がいることを知っていた。今回なんとかお会いしたいと、『ソトコト』副編集長の指出一正氏に仲介の労を取っていただき、メールで約束を取り付けお会いすることができた。

2月に訪ねてから半年が経過している。ボウルダーのホール・フーズ・マーケット（WFM）は、相変わらず成長、拡大を続けているのだろうか、ライバルのワイルドオーツ社はどうなったのだろうか。こうした漠然としたことを考えつつ井沢氏とお会いした。驚いたことにボウルダーの中ではグロサリー間の勢力図は急速に変化を遂げつつあった。WFMのライバルとなる可能性を持っていたワイルドオーツ社は、すでに吸収合併され、ワイルドオーツという名称は残されたものの、経営母体はホール・フーズ・マーケットに吸収されていた。ライバルは大きくなる前に吸収・合併してしまう、というのがホール・フーズ・マーケットの経営戦略である。こうして拡大を続けてきたWFMは、ニューヨークに進出した。

WFMをめぐる、この半年間にボウルダーでいったい何が起きていたのか。井沢氏との数分の会話の中でWFMはライバルの出現により、これまでの路線を守るために店舗面積を二倍に拡張するための工事が始まっていることを知った。ライバルが登場し、緊急に対応を迫られるような状況へ追い込まれていたのである。今回、この論文では、「LOHASの聖地」と呼ばれるボウルダーに視点を置き以下に列挙した問題意識に基づき執筆した。

- (1) ボウルダーで起きているグロサリー間「競争」を追跡し、オーガニック産品をいかに良心的価格で提供できるかをめぐる熾烈な企業間競争が実は、アメリカ社会に次第に増大しつつある「エコロジー重視」の運動の影響を受け始めたために起きているという仮説の検証。
- (2) 20年の伝統をもつファーマーズ・マーケット（週2回、13番ストリートで開かれる路上マーケット）で販売される「新鮮なオーガニック産品」は、ボウルダーの近隣農家や、酪農家が供給することで成り立ってきた。温室効果ガス削減が叫ばれる今日、「地産地消」を長期に実践してきたファーマーズ・マーケットの重要性についてボウルダー市民コミュニティの認識が増大しているという仮説に基づく認識。
- (3) また地球温暖化に対応してボウルダー市全体のエネルギー消費を、電力を中心に今後どのように効率的にコントロールできるかを町ぐるみの実践・政策として100億円を予算化して2008年夏から始まった「スマート・グリッド」構想の影響およびその効果についての認識。
- (4) ボウルダーがLOHASの「聖地」と呼ばれる理由を明らかにすること。

(1) 小坂勝昭「ロハス思想の理解のためにーボウルダー報告ー」日本経営倫理学会「企業行動部会」（2008. 4. 17）、中央大学駿河台キャンパス。

上述の問題群の分析のために徹底した聞き取り調査と現地調査を実施することを意図した。調査を遂行するにあたって筆者にとり協力者の井沢敬氏の存在はこの上なく力強いものであった。今後も共同研究を実施する予定である。ボウルダー調査は具体的には以下の手順で実施した。

1. ボウルダー報告を『ソトコト』に掲載してきた井沢敬氏に対する聞き取り調査を実施し、過去からの「ボウルダー通信」を再読することによって問題意識を整理する。
2. 井沢氏の案内でボウルダー周辺のグロッサリーを順に訪問して作成した調査データを利用した。
3. 文教大学において本年10月2日に実施された井沢敬の「特別講演」のために氏が用意された講義資料を参考にした。⁽²⁾

1. ボウルダーの環境政策の現状

ボウルダーのLOHAS運動の最新情報を提供してきた井沢敬氏は、ジェトロ、ハーバード大学大学院、GMを経て、97年よりボウルダーに移住した。彼の執筆している「ボウルダー通信」の読者である筆者と5分も話すうちに、自ら愛車ホンダのハイブリッド・カーを運転して筆者を案内して下さった。

最初の訪問先は、ボウルダー郡の「リサイクル施設」であった。ここでは、ボウルダー市民がリサイクルを希望する種々の「もの」(materials)を自分の車に詰め、市民自らが運転して運んでくる。このリサイクル施設で束ねられた段ボールなどはパックされて他の再生工場に送られる。この施設から約200メートルの所に次に述べる電力会社「エクセル・エナジー」(Exel Energy)社の火力発電所があり、長い煙突から白煙が上がっていた。アメリカの発電量の47%は石炭を使用している。⁽³⁾

ボウルダーも町のはずれにはreuse-recycle-reduceという例の3Rを掲げたECO・CYCLEという企業や、Western Disposal Servicesというリサイクル企業があり、中古の建築資材や、新品の余剰資材などを求める地元民の姿があった。

井沢氏によれば「このリサイクル施設の周辺にはかつてインディアンの居留地があったが、今は誰も残っていない」とのことであった。インディアン居留地のほとんどはさびれた地域になり、ボウルダーではリサイクル企業の所有になっているというある意味での悲しいアメリカ史を知ることになった。

2. ボウルダーのグロッサリー間戦争の勃発

拙稿「環境思想としてのLOHASの社会学的考察」『文教大学国際学部紀要』(2008.7)では、ホール・フーズ・マーケット(WFM)の急速な勢力拡大にふれ、ニューヨーク進出を果たしたWFMの成功要因を明確にすることを試みてきた。⁽⁴⁾

また、どうしてボウルダーが今日のような「環境重視の価値観を共有する」町へと成長したのだろうか。ボウルダーの市民の多くがLOHASな思想、文化を重視し定着させてきた背景には多くの人材がこの町の魅力に引き寄せられたという事実がある。そして彼らは相互に結びつきを深め、「ロハス

(2) 井沢敬「特別講演—ボウルダーにおけるロハス思想の展開(ほか)」文教大学国際学部(6401講義室)(2008.10.2.)

(3) アメリカも中国も発電エネルギーとして「石炭」(coal)を利用していることは、大変に重要なことである。原油高のせいで日本の廃坑を再発掘してかつての石炭の町が再び活気を取り戻した地域がニュースとして報じられたことは記憶に新しい。

(4) 小坂勝昭「環境思想としてのLOHASの社会学的考察」『文教大学国際学部紀要』第19巻1号、(2008.7.)

の聖地」と呼ばれる今日のボウルダーを作り上げてきた。そうした人材の中にインド出身のハッサン氏のようなカリスマ的な存在があったことについても言及してきた。

「ボウルダー通信」の連載を続ける井沢敬氏は、「オーガニック・センターがめざすもの」(「ボウルダー通信26」)⁽⁵⁾のなかで、「日本からみると、アメリカではロハス旋風が吹き荒れ、オーガニック・ビジネスは大きな進展をしていると思う人も多いはずだ」が、しかし現実を決して甘くないと言う。アメリカ全般がオーガニックを加速させているというより、ボウルダーやパークレイなどの高学歴、あるいは経済的に豊かな地域に「集中的なオーガニックなポケットがある」と指摘し、ボウルダーが全米のナチュラル&オーガニック産業の台風の目である、と述べる。

井沢敬は、アメリカの専業農家が人口の1%未満になってしまったため、生産者の集中・巨大化が起り、生産者保護の目的で作られた農業法は、最近では大手の農業企業を助成するようになった、という。

作物も、とうもろこし、麦、大豆、米と綿の助成策は引き続き行われているが、「手間暇のかかる多くのオーガニック産品」の作付けには必ずしも積極的ではない、と述べる。こうした状況のなかで、オーガニックが伸び始めている背景には、必ずしも供給側の意思ではなく、消費者側の購買ニーズが高まっているという理由がある、と指摘される。

日本のスーパーマーケットでもそうだが、見た目にきれいな「コンベンショナルな」(現状の生産方式、化学肥料、除草剤、殺虫剤、保存剤などを使ったもの)のものが売れるのであれば楽で仕様がないわけだ。消費者も色の青い野菜、形の良いきゅうり、などのコンベンショナルなものを選ぶ。値段の高い有機野菜、有機果実は買いにくい。流通も従来のコンベンショナルな青果物などのほうが、すでに出来上がっていることからコストにも反映しにくい。こうした事情は日米共通である。井沢氏も指摘されるように、人びとはコンベンショナルなものを買うよう、長い年月の間に飼いならされてきたのである。

数年前から、狂牛病、病原性大腸菌O-157、重金属汚染、海外産品の残留農薬など、食の安全が脅かされているという恐怖が次第に安全な食を希求する一般市民の声となって供給サイドへ大きな影響力を行使し始めたといえるだろう。しかし、貧しい階層の人びとからは、安全な食を求めようとしても実現できないという不満が蓄積されていく。ナチュラル産業の関係者が資金を供給してつくった「オーガニック・センター」が2007年に東海岸からボウルダーへと本拠地を移転させた、という事実はボウルダー市民にとっても意味のあることである。このセンターの中核的な仕事は、オーガニック産品がなぜ身体に良いのか、ということを科学的に徹底して解明することである。⁽⁶⁾そして、このセンターの専務理事のスティーヴ・ホフマンはなんと『ロハス・ジャーナル』の共同創刊者でもある。

こうした背景を考えると、すべての人びとが身体にやさしい有機産品を欲するのは当然である。したがって、WFMが他のグロッサリーから追い上げられている、という井沢の指摘は筆者をはっとさせたのだ。いずれ、東京にWFMが進出してくるかも、と予想した私の予想は見事に外れるのである。今回、井沢氏にお会いして、リサイクルセンターの次に案内されたのは、今年の2月に立ち上げられたサンフラワー・ファーマーズ・マーケットであった。このお店は、ボウルダーの中心にあり、購買客がひっきりなし、というのでWFMの影が薄くなり始めたというのだ。2月に筆者がはじめてボウルダーを訪ねたおりに、既にこのサンフラワー・ファーマーズ・マーケットは着々開店準備を進めていたのであった。“Serious Foods...Silly Prices”(まっとうな食を、あほらしい価格で)を標語として掲げるサンフラワーを創立したのは、井沢情報によれば、ワイルドオーツの創立者の一人マイ

(5) 井沢敬「ボウルダー通信 (26) オーガニックセンターがめざすもの」『ソトコト』(2008.2)

(6) The Organic Center(eds), Core Truths – 2006 Compilation of Research.

ク・ギリランドであると知って仰天したのである。

価格が高いのが当然、という態度がWFMの店員にはありありと見て取ることができた。だが、この新たなライバルの出現は相当にショックを与えたようで、WFMが突然お店の改装を始めたというのだ。井沢氏のお誘いで改装中のWFMを訪れた。お店の前の広大な駐車場は、建築資材などの一次的な置き場になっていた。WFMに隣接していた書店Barnes & Nobleがよそへ移転し、そのスペースがWFMの拡大スペースとなるようだ。改装中の店内に入ると、前回同様に整然と有機産品が置かれ、消費者を招く。お魚のコーナーも充実しており、鮪、鮭、など新鮮であることが日本人でもわかるほどの商品の品ぞろえである。

売り場面積を二倍に拡張する戦略に踏み切ったWFMに対して、この半年間に急速にWFMを追い上げている「サンフラワー・ファーマーズ・マーケット」は何故人気があるのか。井沢氏の解釈は、商品の価格帯が金持ちでなくても購入できるように設定したことである、という。消費者のニーズを無視した商売はいずれ成り立たなくなる。身体に良いというので殺到した客も、冷静に行動するようになる。ボウルダー近辺には、非常に多くのスーパーマーケットが林立し始め、郊外のWAL-MARTも客集めに懸命になり、有機産品のコーナーを設けていた。セーフウェイも同様である。Costco（コストコ）はすべてダース売り（ケース販売のみ）で、1個当たりのコストは子沢山の家庭には助かるのですよ、という井沢氏の説明にコストコの販売政策がみてとれる。最近では、日本全体へチェーン店が拡大しつつある。会員制システムが特徴であるが、クローズドではない。こうしたダース販売もWFMに対しては外圧であろう。WFMはフォーチュン500社に入り、従業員も満足度が高いと評価されていた。しかし、購買者のニーズを汲むべき供給サイドが現状に満足しすぎたということか。支払う消費者は厳しい。

人気のサンフラワー・ファーマーズ・マーケットもチェーン店をボウルダー近郊に既に2店舗オープンしている。こうしてWFMが店舗改装に踏み切った理由がようやく見えてきた。また、ボウルダーの興味深い点はいわゆる「マクドナルド」（現在2店舗）のようなファーストフード店が極端に育たない地域であることだ。LOHASを標ぼうする町の特徴が、オーガニックを重視することであるとすれば当然の成り行きである。

日本に帰国してからも汚染米、冷凍インゲンなどの消費者を混乱させる食料事情がメディアを通して報じられ、中国産の輸入食品の安全性への疑念で日本中がゆれていたことは周知の事実である。輸入に過剰に依存している我が国の食糧自給率（39%）に対して食の将来に不安を持つ消費者は増加している。

3. ボウルダーのファーマーズ・マーケットを支える「地産地消」の伝統

我が国では最近、二酸化炭素削減のために「地産地消」が緊急の課題になりつつある。農林水産省の2001年の試算では日本のフードマイレージ（food mileage）は、総量で世界の中で群を抜いて大きく、国民一人当たりでも一位である（農林省統計参照）。8月にボウルダーのサンフラワーズ・マーケットの店内に置かれたパンフ“Boulder County's EAT LOCAL! Resource Guide”は「フードマイレージ」がボウルダーでも関心をもたれていることを示唆する資料である。ボウルダーに観光で訪れる人びとが必ず訪れるのが路上にテントを並べるファーマーズ・マーケットである。毎週水曜日は午後4時から8時まで、土曜日は朝の8時から午後2時まで、13番ストリートに近隣の農家、酪農家が収穫したての有機野菜、果実、花、植木、食肉などを運んでくる。テントがならび、その間を買い物客

が楽しく買い物をしながら知り合いに出会うと互いに声を掛け合い、またお店で働く人びとと挨拶を交わす姿をみるとこのマーケットが果たす役割と人気のほどがわかる。まさにボウルダーコミュニティがここにあるという心地よい交流を肌で感じる。

歩行者天国のようにクルマの乗り入れを禁止して行われており、井沢の「ボウルダー通信（16）生態系重視のファーマーズ・マーケット」（2007、7月号）⁽⁷⁾によれば一日の通行量は1万2000人になる。この人気の野外マーケットの歴史は古く、30年前にさかのぼる。仕掛けたのは、R. フォイ氏（コミュニケーションアーツ社の会長）や、D. ボールドック（ボウルダー・ブックストア・オーナー）などの事業家、文化人であった。彼らは市当局に働きかけ、近隣農家を動かし、ファーマーズ・マーケットの原型をつくった。⁽⁸⁾

井沢はこうしたファーマーズ・マーケットが「コミュニティに農業基盤をしっかりと根付かせようという、当時としては反時代的な思想からの行動だった。つくられた枠組みがしっかりとしていたからこそ、現在のファーマーズ・マーケットは、骨の芯までロハス的な思想で固まっている」⁽⁹⁾と指摘している。

このマーケットの果たしてきた役割はボウルダーでは非常に重要なものだった。この路上マーケットが提供してきた「オーガニック産品」はボウルダーの住民にとって今後ますます必要不可欠のものとなるであろう。

しかし、このマーケットへの出店は、誰でもができるわけではなく、出店するための条件が設定されている。マーケットで店を構えることができるのは、青果物関係と、飲食関係の地元飲食業者で、年間契約が必要である。青果物に関しては、地元近隣の中小農家に限られ、中間卸業者や他州の業者、輸入青果物を扱う業者は認められない。⁽¹⁰⁾ 飲食業者についても手作りの業者を参加させてきた。参加費用は、青果物関係が5%、飲食関係が15%、をNPC（ノン・プロフィット・コーポレーション）に支払う。このNPCのボード・メンバーはメンバーシップ費を支払っている近隣農家である。そしてNPCは市に売上税3.5%を支払う。

このファーマーズ・マーケットの専務理事のマーク・メノグ氏は、元シリコンバレーで成功した実業家であるが、9.11の後にボウルダーの生活に魅せられ、商業化されていないファーマーズ・マーケットに人生を賭けたひとである。彼は、農家とレストランの間に連携をつくり上げ、「自宅菜園を奨励するプログラム」に取り組み、「生態系重視」のボウルダーをめざしてきた。

井沢の指摘をまつまでもなく、『文化的創造者』の著者ポール・レイとシェリー・アンダーソンは、「生態系の持続可能性」（ecological sustainability）に多くの頁をさいている。1972年、ローマクラブの『成長の限界』が、人口増加がこのまま続けば100年以内に資源の枯渇や環境悪化によって人類の成長は限界に達すると警告を鳴らした。そして、続編『限界を超えて－生きるための選択』（1992）では、資源採取と環境汚染の行き過ぎによって21世紀前半に破局が訪れる、というシナリオが提示されている。

この自然環境に恵まれたボウルダーにいと、人びとの環境意識の高さに圧倒されると同時に、『成長の限界』や、『限界を超えて』が発し続けた「警告の意味」を自然に受け止めている自己に出会う。ボウルダーのスーパーマーケットに置かれた商品には、有機認証シール、オーガニックのシール、さらに経済的に第三世界を取奪していないことを表明するフェアトレードのシールなどが貼られている。牛肉などもオーガニックのシールが貼ってあるのを見ると「環境コンシャス」が当たり前の町だということがわかる。一部のレストランでは風力発電の電気を購入しているお店もある。

(7) (8) (9) (10) 井沢敬「ボウルダー通信（18）生態系重視のファーマーズマーケット」『ソトコト』（2007、2）

P. レイ＝S. アンダーソンがLOHASの担い手として提案した新しいカテゴリー「文化的創造者」は、アメリカ人の中の「信心深い伝統主義者 (Traditionals)」(26%)、科学技術と民主主義を信じ、現代アメリカの繁栄を作り上げてきた「現代主義者 (Moderns)」(48%)、の次に「新たな階層」としてのLOHAS層 (26%) が生まれつつあることを実証してくれた。

4. 生態系 (ecology) 重視の聖地ボウルダー

『成長の限界』が警告を発したにもかかわらず、人類は経済成長を追い求め、生産性の向上にしか目をくれなかった。効率性を重視してきた産業界だけでなく、農業にも効率性重視の経営が導入され、機械化、品種改良、人工肥料、除草剤、殺虫剤などを使用した結果、驚くほどの生産性を挙げたのである。井沢は、「生産性の向上という呪文に縛られ、『生態系』がないがしろにされてしまった」⁽¹¹⁾と言う。そして、地球温暖化が世界中で問題視されるようになり、「生産性に偏っていた振り子を、より生態系に戻そうとする運動が盛り上がりつつある」⁽¹²⁾と指摘する。アイオワ、イリノイ、インディアナなどの穀倉地帯は、大量のとうもろこし、小麦などの効率的生産を続けてきたが、エタノール生産への要請が急速にこれらの穀倉地帯を農業生産から「代替エネルギーの生産地」へと衣替えさせ、世界の食料の需給関係に大きな変動をもたらした。従って、ボウルダーのような有機農業の生産地をどのように確保していくのかは今後の非常に重要な課題であることは間違いない。

さて、ボウルダーが「LOHASの聖地」と呼称されるにはそれなりの理由がなければならない。筆者には常々気にかかる課題の一つであった。しかし、昨年春に井沢氏が書かれた「ボウルダー通信 (17) ひとつの教派がつくった病院」がその疑問に対するヒントを与えているのではないかと通信を再読した。

しばしば井沢氏のボウルダー通信から徹底した調査への執念を感じることもある。今回のサンタリーの歴史に関する資料収集も、ボウルダーの貴重な歴史を紐解くキーとなっている。ボウルダーは海拔も高く、風光明媚で天候も良いのでここに100年も前にサンタリーが設けられ、1905年、正式に「ボウルダー・コロラド・サンタリウム」と名付けられた。サンタリウムは結核療養所などのサナトリウムと異なり、ヘルス・リゾートを意味する。クーラーのない当時のアメリカでは夏になると富裕層が避暑地の高原へと移動したことは容易に想像できる。サンタリウムの宿泊料金は食事つきで1日あたり5～7ドルで、当時ではかなりの高額であった。通信の井沢の文章は非常に興味深い。

「その頃のアメリカ人は、食糧を保存するような冷蔵庫がないこともあり、鮮度の高い食べ物を摂ることができず、バランスの悪い食事をしてきた。しかも男性であればほぼすべての人が喫煙の習慣があるなど、現代的な健康知識もなく寿命も短かった。冬になると人々は、牛肉にパンだけを食するというようなアンバランスな生活を送った。結果、多くの人が病気で早死にした。」⁽¹³⁾

この井沢の叙述からボウルダーの住民たちが当時どのような生活スタイルで人生を過ごしていたのかが大変良く理解できる。先に述べたサンタリウムの運営・管理は、セブンス・デイ・アドベンチスト教派の信者の人びとであったが、その中にミシガンから当地を訪れていたジョン・ケロッグ博士もいた。⁽¹⁴⁾

(11) (12) 井沢敬「ボウルダー通信 (18) 生態系重視のファーマーズマーケット」『ソトコト』(2007. 2)

(13) (14) 井沢敬「ボウルダー通信 (17) ひとつの教派がつくった病院」『ソトコト』(2007. 5) 134～135頁。

現代のセブンス・デイ・アドベンチスト教派の人たちは、アメリカ人の平均寿命よりも8年くらい長生きするらしい。その理由は、1800年代当時のアメリカ人の健康の具合を観察した教派メンバーのエレンとジェームス・ホワイト夫妻が、優れたスピリチュアルなライフスタイルを過ごすのにどうしたらよいか、新たな健康ライフスタイルを考え出した基盤があったからであるという。⁽¹⁵⁾

この教派がたどり着いた結論は、「禁酒、禁煙にはじまり菜食主義、さらには生きることのホールネス（全体説）を求め始めた。つまり肉体的な健康を追い求めるだけでなく、より精神的な豊かさを追い求めようとする包括的なライフスタイルである。」⁽¹⁶⁾ 彼らがユダヤ教の習慣であるサバス（安息日）を導入したのもしかり。

LOHASな生き方とは、と考えていくと「生態系重視」の考え方は1905年には全く問題にならなかった。したがって、LOHASのもう一つの要件「健康重視」は多くの課題を突きつけている。井沢の研究によれば、

「病気に対する意識や知識も低く、病気の原因は、身体が刺激を受けすぎるか、刺激が足りないかのどちらかだ、と勘違いをして、現代だったら考えられないような対症療法をおこなったりした。刺激が足りないと判断されるとテレピン湯を飲ませたり、電気療法をしたり、逆に刺激が多すぎると判断されると血液を意図的に抜き出したりしたらしい。風邪を引くと孤立させ、暗室のような所に閉じ込めたりもしたそうだ。」⁽¹⁷⁾

こうした記述を読むと人間の健康維持のための医療や工夫は近代医学の急速な発展によるものであることがわかるが、しかし、「いま何故オーガニックなのか」という問いに答えることは容易ではない。

5. ボウルダーの実験—スマート・グリッド都市構想—

温暖化問題は世界中に大きな危機感を投げかけている。LOHASな町ボウルダーは有機産品で大きな評価を集めてきたが、温暖化に対する対応はどうなっているのか、こうした疑問は誰でもがもつだろう。井沢氏は、こうしたボウルダーの対策が既に提案されていることを「ボウルダー通信」の中で指摘していた。次に、「未来世紀ボウルダー」の未来図を取り上げたい。

エネルギー枯渇を専門家がどれほど警鐘を鳴らしても、アメリカ国民は平気でSUVを購入し、楽しんできた。しかし、昨年からの石油の高騰で一般市民も少し態度に変化が現れたようである。井沢氏も最近の傾向として、ハイブリッドの価値がようやく見直され、SUVを購入した層があまりに燃費効率が悪いのでハイブリッドに交換しようと思っても、SUVの下取り価格がどんどん下がっており、買い替えができない層が増えてきた、というのである。SUVはいまや無用の長物と化した感がある。アメリカ人にとって、ガロン4ドルを超え始めた時点で、ついにエネルギーのコストをマジに考えるようになってきた。消費者のエネルギー意識はこうした毎日支払うガス代をいかに節約するかという日常の問題から変わっていく可能性がある。日米の市民に共通の問題だが、洗濯機、冷蔵庫、クーラーの毎月のコストは、合計で電気代として引き落とされるため、個別の利用のコストはわかりづらい。「ばちばち運動」も当然意味ある行動であるが、こうした行動を続けるだけでは一体将来の生活はどうなるの、という未来の見えないレベルでしかない。都市の公共インフラを変革することなど今の日

⁽¹⁵⁾ ⁽¹⁶⁾ ⁽¹⁷⁾ 井沢敬「ボウルダー通信（17）ひとつの教派がつくった病院」『ソトコト』（2007.5）134—135頁。

本の財政では不可能であろう。一般市民も自民党には何も期待してはいない。ところが、ボウルダーでは、事情が違う。いま、ボウルダーで何が始まろうとしているのか。電力・ガス会社のエクセル・エナジー社が中心となって、都市全部を新たな電力に関わる「スマート・グリッド」つまり、発電所、送電線、配電サブセンター、などと家庭のすべての電力配信ネットワークをエクセル・エナジー社と消費者側の双方向で結び、トータルの電力使用を月単位で見のではなく、需要時とピーク時のコスト計測や個別の器具の利用状況までが瞬時に把握できる方式を作ろうという壮大な計画を打ち出している。このような実験は、部分的には、世界各地でおこなわれてきたらしいが、ボウルダーの実験は都市全体をカバーし、10万人都市に100億円以上を投資する大掛かりなものである。ボウルダーはアメリカで最初のスマート・グリッド都市になるわけである。

実は、2008年8月1日、ボウルダーでは、5万世帯と、事業所のうち、15000か所にフル自動でモニタリングができるデジタルのスマートメーターが設置される。したがって、これらの家庭や、事業所では瞬時に電力消費の利用状況がわかることになる。利用状況が、あらゆる角度からみられる分析用のウェブ・ポータルも立ち上げる。2009年の年末には、都市全体のネットワークが完成する予定である。

その段階で、プラグインハイブリッド、ソーラーパネル、風力発電、なども双方向で連動させていく画期的試みである。

エクセルエナジーのロイ・パーマー常務によれば、ボウルダーは手頃なサイズの都市であること、住人の環境意識が高いこと、ブロードバンドに接続している高学歴者が多いこと、街がグリーンゾーンで囲まれており、配電所が複数の行政都市にまたがり、そのため市場実験ができる、と述べている。

結び

ボウルダーの研究を始めてから多くのことを学んだ。ボウルダーには「環境ビジネス」を起業した多くの経営者がいることに驚いた。環境問題の克服がビジネスの現場と直結する問題であることを日本の経営者はもっと学ぶべきである。エコロジー（生態系）維持のために行政が果たす役割や、企業経営の役割、個人の果たす役割、と考えると「食の生産」が実は生態系維持の課題と最も密接な関係を持つことが理解できる。汚染米問題や、いちご、りんごの農業問題など一般人には知らされていない問題はこの上なく多い。微小な農業の使用問題と安全性の関連など、公開すべき情報は多いが波及効果を恐れる余り問題は常に封印されてしまう。

環境汚染問題や、温暖化問題は次々にわれわれに難題をもちかけてくる。北極の氷の問題と汚染米問題は同じレベルの問題ではない。これまでの人類が選択してきた政治や経済・金融政策の問題がこうした環境問題を引き起こしてきたことは否定出来ない。容易には解決できそうにない問題から、解決しうる問題まできちんと「レベル」を整理し、問題は公開し、人類全体が協力できる体制を構築していくことがますます要請される。

※本稿は、平成20年度「国際学部 共同研究」の成果の一部である。